

# 移民第二世代は学校経験をどう語るか（3）

## —ブラジル系ニューカマーの事例—

鳥取大学 児島明

### 1. 目的

本報告の目的は、ブラジル系ニューカマー第二世代の学校経験にエスニシティが及ぼす影響について、とくに義務教育段階における友人形成上の課題に注目し、当事者の視点から理解することである。

ブラジル系ニューカマーについて学校とエスニシティの関係に注目した研究はこれまでもなされてきた（例えば、山ノ内 1999、児島 2006、森田 2007）。これらの研究は、学齢期にある子どものエスニシティが学校における教師-生徒間あるいは生徒間の相互作用のなかでいかに立ち現れ、利用されるかを、主にエスノグラフィーの手法を用いて解明したものである。そこでは、子どもが「アイデンティティ・ポリティックス」（森田 2007）や「抵抗」（山ノ内 1999、児島 2006）の実践を通じて、異質性や他者性が否定・矮小化されがちな日本の学校文化をいかに生き抜くかが具体的に描きだされた。

だが他方、これらの研究は、まさに学齢期にある子どもの学校での相互行為や当該場面での発話など、観察可能な行動面に比重が置かれていたため、そうした実践にいたる当事者の背景や心情、遂行した行為に対する葛藤や揺らぎ、その後の進路形成に及ぼす影響などについては検討の余地を残している。すなわち、学校における困難を克服するための道筋がその後の進路形成においていかなる実効性を有するかを困難やその克服に対する当事者の理解から吟味する作業は、いまだ十分になされていないのである。

そこで本報告では、主に次の二点を研究課題とする。第一に、ブラジル系ニューカマー第二世代が学校における困難をどのようなものとして経験したかを明らかにすること。第二に、そうした困難の克服がどのようなかたちで試みられたのかを、その後の進路形成も視野に入れて明らかにすること。

### 2. 対象と方法

ブラジルにルーツをもち、義務教育段階で日本の学校に通った経験をもつ19歳から30代前半の若者20数名を雪だるま式に集め半構造化インタビューを行った。対象者は日本生まれもしくは就学前に来日した者が多数を占める。

### 3. 結果

ブラジル系ニューカマー第二世代の学校経験はエスニシティをめぐるかれらの位置取りの実践と密接にかかわっていた。第一に、多くの対象者が同級生の間に作用する同調圧力の存在について触れていた。かれらはこうした同調圧力をほとんどの場合、自らが「日本人でない」ことにより経験されるものととらえており、「日本人」の同級生のなかに自らのエスニシティをどのように位置づけるかをめぐって試行錯誤していた。第二に、いじめはたいていの場合、日本人生徒による同調圧力のもとで外国人性が逸脱視されることで生じていたが、なかには、外国人としての居場所確保の実践が、日本人生徒を巻き込みながら他の外国人生徒を排除するというかたちでなされる場合もあった。第三に、親の移動にともない頻繁な転校を余儀なくされる場合、友人関係の構築も、移動や移動可能性に大きく左右されるかたちでなされる傾向が見られた。そして、それはしばしば、コンサマトリーな志向を有する反学校文化との親和性を感じさせるものであった。第四に、トランスナショナルな社会空間を生きることで生じるエスニック・アイデンティティの葛藤が、学校での友人選択に密接に結びつく例もあった。

### 文献

児島明, 2006, 『ニューカマーの子どもと学校文化』 勁草書房.

森田京子, 2007 『子どもたちのアイデンティティ・ポリティックス』 新曜社.

山ノ内祐子, 1999, 「在日日系ブラジル人ティーンエイジャーの『抵抗』」 『異文化間教育』 13号, pp. 89-103.

謝辞 本研究は科学研究費補助金基盤研究 (B) 26285193 の助成を受けたものである。